

奄美喜界島方言の時間表現から —アリ・リ系のかたちをめぐって—

まつもと ひろたけ

（喜界島方言）【要 旨】

古代日本語で時間表現にかかわる、ヨメリ、カケリのようなアリ・リ形は、現代琉球方言では南琉球方言に存在が確認されているが、北琉球方言に属する奄美喜界島上嘉鉄方言にもみとめられる。その用法はシタリ・シテ形と同様、代表的な用法が終止、中止、分析的なくみたてにまたがる。また、古代日本語とちがって、二段活用タイプ動詞からもつくられる。これらのことを、十分ではないが例をあげながら報告する。

【キーワード】

奄美喜界島上嘉鉄方言、アリ・リ形、終止用法、中止用法、分析的なくみたて、二段活用タイプ動詞のアリ・リ形

○ はじめに

喜界島上嘉鉄方言は、島内でもヨソじまのひとたちが、あそこのユミタ（ことば）はほかとちがう、わからないといっているのをきくことのおおい方言である。上嘉鉄ユミタに接するなかで、そのようにいわれる原因のひとつに、動詞の語形のつくりの問題があるのではないかとかんがえるようになった。以下では、国立国語研究所「危機方言」研究プロジェクトによる2010年喜界島方言の調査のさいの調査票にある、他方言のシテ中止形にあたるかたちをふくむ例文のうち、以下にあげるようなものを取りあげる。調査票とは逆に、方言例をさきにしめた。カタカナ表記は松本がこころみる暫定的なものである。また標準語訳は、わかちがきや文字づかいなど、調査票の表記のままではない。

○ 中止的な用法

まず、…シテ（～シタ）のような中止的な用法の例があった。

1. ニモトウヌ ウブツサ ムン ナレー、タアリエー ムチェージヤンドー。 にもつが おもかったので、ふたりで もった。(31)
2. ウマーヤ ウミヤ チカサン ムン ナレー、イユーヌ マアサ ウシラン。 ここ

は 海に ちかいので、魚が うまい。(38)

うえの例は、ヨソジマにきかれるかたちは、ナレーではなくてナティ（なつて）である。～ナレーが、その～ナティと同様原因をしめしている点は上嘉鉄もかわりはないが、ナティにみられる、シテほかのテ形に対応する子音tおよびそれを出発点とする子音が、ここではでてこない。

○ 分析的なくみたて

つぎのものは、シテが補助動詞とくみあわさって分析的なくみたてをなすものに対応する、上嘉鉄方言のかたちである。やはりt音系の子音があらわれない。分析的なくみたてにくわるシテ形にあたる部分には、5、6の例のようにNでおわる語形もみられる。うえの例にあわせれば、それぞれフレ、ムドゥレーのようになっていたはずである。

3. ジロー、フン ニモトウオー ヤーマディ ハタミエー イジエー クリ、次郎、この にもつを いえまで かついで いって くれ。(30)
4. ガズコヌ ムントウ テイトウムン アッサウバ ハナコエー ホーエー クリリヨ、和子のと おなじ げたを 花子にも かって やろう。(72)
5. ナマ アミヌ フレ チャン、あつ、あめが ふつて きた。(15)
6. ハチガツニエー ムドゥレン シッカム ワカランドー、八月には かえつて くるようだ。(25)

○ 融合化している例

シトル形式にあたる語形は、シテ ヲリのような分析的なくみたてではなく、融合的なかたちでてくるが、このなかにもt系の子音がみられないものがある。

7. シリュドウイヌ テイントーウバ トゥボーリ、まっしろな とりが そらを とんでいる。(18)
 8. ダー フン イユヌ ナマイエ ワカリヨンニヤ、おまえは この さかなの なまえを しているか。(41)
 9. シューヤ サーイー トウクリッカ ダー シロツカヤ、さけは どうやつて つくるか おまえは しているだろう。(43)
 10. ハナコー キユカラ ヤマイエー ネインボンダー、花子は きのうから 病気で ねている。(66)
 11. アミヌ フルン トウキーニエー アネーヤ ヤーエー テレビバツカイ ミロンドー、あめの ふる 日には ばあさんは いえで テレビばかり みている。(64)
- なお、この方言のシヲリ系の語形は、カミンくう (36)、トウクリンつくる (44) (ともにm語尾形) のように、他方言に一般的にみられるかたちになっているので、7のトゥボーリ以下のかたちは、シヲリ形を出発点とするものではなく、ほかの形式に由来するものであることがわかる。なお、ワカリヨンのような～オン形は、奄美大島方言では～ウン系に対立するていねい～謙讓形式として規則的につくられるが、意味の点からいって、そ

れとは関係がない。

トゥボーリが他とことなる-リでおわるかたちであることにはあとでふれる。

○ 終止的な用法

調査票の例文からはでてこなかったが、いままでみてきたt音系のあらわれないシテ中止形相当のかたちは、シテ中止形、あるいはシタ形そのものの用法に対応して、過去終止形のメンバーにもくわわっている。そのばあい、シタ系のテ過去形もでてきて、非シテ過去形と共存している。この非シテ過去形は、いままでみてきたように中止形～連用形としての用法をもつが、シタ形との対応をみるかぎり、中止・連用形でなく、終止形であるかのようにである。

12. ワンヌ ホーエンドー. わたしが かったよ。
ホータンドー.
13. ワンヌ ヌメンドー. わたしが のんだよ。
ヌダンドー.
14. ワンヌ ジッタ ナゲントー. わたしが まりを なげたよ。
ナギタンドー.
15. ワンヌ ヤギー ナエントー. わたしが やぎを つないだよ。
ナダンドー.

以下、シタ過去形ははぶいて、非シテ過去形だけあげる。

16. セー ヌメン ヤーカチ ムドゥレンドー. さけを のんで いえに もどったよ。
17. ティガミ カチエーン ポストエ イリエンドー. てがみを かいて ポストに
いれたよ。
18. アリム ガバ ヌメン. かれも たくさん のんだ。
19. キュ ヌー センヨ. きのう なにを したか。

なお、16、17の文中にでてくるヌメン、カチエーンというかたちは、問題にしている語形の中止的な用法である。

○ アリ・リ系の語形の存在

北琉球方言のシテ中止形は、代表的な用法として、いままできた1. 中止的な用法、2. 分析的なくみたての主要語にくわわる用法、3. 過去テンスの意味をもって終止形としてはたらく用法のみつつがあるが、喜界島上嘉鉄方言のヌメン系はその用法にまたがっている。そして、語形のつくりのうえではシタ、シテにみられるt系の子音要素がなくていいことは、うへの例からみるとおりである。

このような特徴をもつ語形は、いままでのところ、現北琉球方言にはみられないが、本永守靖1982「伊良部方言の研究」には、南琉球方言に属する伊良部島佐和田の、小論にいう非シテ中止形的な中止形が、中止的な用法、分析的なくみたてにくわわる用法にもちいられることがとりあげられている。ただし、時間表現にかかわる終止的な用法に関しては

ふれていない。この終止的な用法もふくめて、南琉球方言にあらわれる非シテ中止形の用法が、いま喜界島上嘉鉄にみえてきた三用法にまたがっていることを明快に指摘した論文として、名嘉真三成1982「宮古西原方言の動詞の活用」がある（本永1982、名嘉真1982はともに仲宗根政善古希記念論文集委員会編1982『琉球の方言と文化』に所収）。

南琉球方言のこの非シテ中止形について、おなじく名嘉真1978「琉球方言の音便形について」（『沖縄文化』15-1）は、その出発点をシテ中止形にもとめていて、アクロバットのともいえる音変化を想定している。このかんがえは名嘉真1992『琉球方言の古層』（第一書房）でもかわっていない。

一方、中本正智1990『日本列島言語史の研究』（大修館）は、これに関して、「名嘉真1978では、宮古方言の *kaki*: は「て」が付いた形から発達したものとしている。」（511ページ）と注記した本文で、「宮古、八重山の *kaki*: については、*te* が付いたものかどうか、さらに考察を要する問題である。」（508ページ）と、本人の見解をのべている。

中本1990にはまた、南琉球方言の過去形に *kakjaN* のようなかたちがでてくることがあるという指摘があり、これが、「『書き』に『有り』が付いた形なのであって、『たり』が付いた形ではない」（497ページ、西表祖納方言のところ）のように説明されている。中本1990のこの説明と、さきの名嘉真1978に対する見解とをみると、中本1990は、松本のいう非シテ中止形に関しては、留保つきながらも、シテ中止形起源をすてきれないでいるのに対して、カキャンのような過去形がタリ系でなくアリ系であることは、はっきりと断言しているといっている。

ただ、中本1990では、非シテ中止形の過去終止形的な用法のことをとりあげていないようである。一方、名嘉真1992はカキャンのようなかたちを、過去形としてあつかっていない。しかし、この両書のとらえかたは、かさねあわせたほうが、事実をうつしだすことにちがづくのではないか。カキャンをアリ系の過去形とするなら、アリ系の過去形をもつ方言にみられる、シテ中止形由来の過去終止形のことをおもいおこして、非シテ中止形にも過去終止形的な用法があることをかぞえいれるべきだった。それはすでに名嘉真1982が指摘している。そして、カキャンとカキーとを、統一した説明は、前者がアリ系の過去形なら、後者もアリ系のカキアリを出発点とする中止＝終止形だということになる。これなら、中本1990の危惧していた、カキーにもテがはいっているという仮定をとらずにすむ。

○ 以前のべたことから

なお、この点に関して松本1982「書評と紹介『琉球の言語と文化』」（『南島史学』20）で、つぎのようにのべたことがある。

…それ（カキーがカキテを出発点にするとみること—引用者）に異をたてるには名嘉真も意識している仲宗根の指摘、音韻法則上は、*kakii* は **kake*(e) に対応するという原点にもどる必要があるだろう。ところで、**kakee* は、さらに〈カキ・アリ〉にさかのぼれないだろうか。音声的には可能だとおもうし、過去の意味をあらわすことも説明で

きる。古代語のカケリは*kaki-ariに由来し、カイタのもとのカキタリ<カキテ・アリにならぶかたちである。また、中本「琉球方言動詞“書く”の活用」（都立大『人文学報』1978年）によると、宮古方言はあげられていないが、八重山、与那国などの一部の方言に、kakjaN, kake:のように、*kakiamu (kakiari)系の過去形をもつものがあることが指摘されている。おなじかたちは、宮古にもあったのではないか。さらに、〈～シテ〉系ではなくて、〈～シ〉系の旧連用形の中止的な用法も、『沖縄語辞典』のjunui（よんでおり）、ʔaree simuçi junui, 'waNnee zii kacun.（かれは本をよんでおり、わたしは字をかいている。）のように、琉球方言にでてくる。カキヲリ系の中止形に対して、カキアリ系の中止形がありえて、それが、カキテ系中止形とおなじく、過去の意味をあらわしうることは、かんがえていいような気がする。そうだとすると、やはりカキアリ系にさかのぼる過去形をもち、古代東国方言のながれをひく八丈島方言と、宮古をふくめた先島方言のかよいが、言語的にも、歴史的にも、一層興味ある事実となってくる。（101ページ）

うえに引用した松本1982は初稿追記で中本1982「琉球語の研究は日本語の歴史にどう関わるか」（『国文学』1982 12月号）の説を紹介する。中本1982には「北琉球方言にもカキアリ系の痕跡とみられる中止用法があるという指摘」がなされていることもとりあげている。これは松本1982のようなかんがえかたをするたちばかりは重要なことだとおもってかきたしたのだが、中本1990にはこのことに関する記述はみられない。

そこで、あらためて、中本1982から、北琉球方言のアリ・リ中止形にふれているところをぬきだすと、つぎのようにとかれている（音声記号表記は省略）。

ただし、北琉球には「リ」系統の痕跡がみられる。たとえば、沖縄に、

ツンジャーイ（行って）

トゥヤーイ（取って）

ンジャーイ（見て）

ツンジャーイ（出て）

があるけれど、これらは、「行って、それから（～する）」のようなニュアンスで用いられている。これらは、おそらく、「行き有り」のような完了形の中止的な用法であっただろう。

として、これらのかたちを、『おもろさうし』の「いきやり、とりやり、とやり、みやり、いちゑやり」へと関連づける。

中本1982のあげるかたちにしたものとして、喜界島方言にはトゥヤーヌー、トゥヤーチューのようなかたちがきかれるが、意味は～シナガラのように同時性をしめす点で、中本1982にいう先行性とはちがう。また、奄美大島方言には、トゥリヤガチナのような喜界島方言にややにたかたち（南部方言）のほかに、トゥリガチナのように、あきらかに旧

連用形トリにあたるかたちを出発点とするかたちもみられる。そこで、喜界島方言のトゥヤーヌーと沖縄のトゥヤーイの同時性-先行性という意味の差を、(動作)継続性-完了性のちがいを説明しようとするようなことは、しないでおく。

そのうえで、うえにみてきた上嘉鉄方言のハタミエーかついで、ヌメンのんで、ホーエンかって、のようなかたちがノミアリ、ノメリ系のものであると、松本1982をうけていっておきたい。だとすると、上嘉鉄方言にみられる、他方言のシテ中止形にあたるかたちは、北琉球方言のしまじまをとびこえて、南琉球方言と共通するものということになる。タリ、テ系の過去形をつかうおなじ喜界島のヨソじまから、あそこのユミタはほかとちがうといわれるのも当然であろう。

喜界島方言に音声の面で、ガ行鼻濁音がのこることは知られている(小論ではふつうにガ、ギ、グ…でしめす)。音韻的な位置づけの問題を別にすれば、これは南琉球方言の一番はしの与那国方言と共通である。今日の新シテ系=アリ・リ系中止形の存在は、それほど両はしではないが、南琉球方言と北琉球方言のはしの喜界島方言との一致という点で、ガ行鼻濁音と同様、やはり周囲分布に属する。『おもしろさうし』にアリ・リ系中止形がみられることと関連して、中本1982の指摘が、テ、タリ系以前の時間表現としてアリ系が琉球方言全域に存在したかもしれないこと、さらにそれが、八丈島方言におなじくアリ・リ系の過去表現がのこることとどう関連するか(関連しないか)は、以前より問題としていくらか明確になってきたといえるようである。

その後、上嘉鉄調査のさいおそわった富豊西さんと、喜界島郷土研究会員でおなじ上嘉鉄の生島勝範さんから、調査票からききとった動詞項目以外の中止的な非シテ中止形の例ほかをおぎなってもらうことができた。

○ 中止形

はじめは中止的な非シテ中止形である。

20. セー ヌメン ヤーカチ ムドゥレンドー. さけを のんで いえへ かえったよ。(前出)
21. ティガミ カチェーン ポストエ イリエンドー. てがみを かいて ポストへいられたよ。(前出)
22. ロクジニ ウィーエン ットゥラ アライエンドー. 六時に おきて かおを あらったよ。

標準語ノンデモ、琉球諸方言にみられるヌディンにあたるかたちも、非シテ中止形をもとにつくられる。

23. ウン セーヤ ヌメンム マサ ネン. そのさけは のんでも うまくない。

○ 分析的なかたち

以下は分析的なかたちにくわわる非シテ中止形である。シテクレル形とシテクル形にあたるものがでている。

24. ットゥナ ノーエン クリリ. つなを なってくれ。
25. フン カァ ウチェン クリ. この子を ぶってくれ。
26. ウレー ムチェン クリ (リ). これを もってくれ。
27. ワンニ ウシエーン クリ. わたしに おしえて くれ。
28. ワタ ヤメン チ. はらが いたくなって きた。
29. ティダ イジエン チ. 太陽が でて きた。

○ シテアル相当形

調査票例文からは

30. イトウクヌ ウドゥヌ ヤンヒラー ウイーエー フシャーリ. いとこの 布団が やねの うえに ほしてある。(16)

という総合的なかたちがでてきたが、あらためてかたちをたしかめてみたら、分析的なくみだてでこたえてくれたので、つづけてあげておく。

31. セー ヌメー アンドー. さけを のんで あるよ。
32. トゥーヤ シメー アンドー. 戸は しめて あるよ。
33. ダームン トゥレー アンドー. きみの ものを とって あるよ。

これらのヌメー、シメー、トゥレーはノミアリ、シメアリ、トリアリに由来するかたちとわかる。一方、はじめの分析的なかたちはホシテ アリから音変化したのか、ホシアリ・アリからきたものなのか、形態論的な情報がそろわないとはっきりしない。しかし、ヌメー アンドー以下の例文から、ノミアリ・アリ系のかたちがあることはあきらかなので、当面の問題に関してはこれでさしつかえない。

○ m 語尾形と ri 形

いままでみた例では、終止用法どころか中止的なばあいも、Nでおわっている。終止系列と中止系列の～riの起源がことなるとすればはなしは別だが、おなじだとすれば、シテ形が終止形化したのと逆に、m 語尾終止形が中止形化したことになる。あるいは、中止的なNおわりのかたちのNは、中止＝連用表現を補強する -ニに由来することも、かんがえるだけならかんがえられる。うちけしのノマズに -ニをつけたノマズニがあるように。喜界島方言にもトゥイイニ（とるときに）、イナサイニ（ちいさいころ）のようなかたちがきかれる。

しかし、この方言でも、非m 語尾系の～riでおわるかたちが、終止形にあらわれることがある。

34. アン ヤー デインキ アーローリ. あの いえは 電気が ついている。

35. ミズ ナガリオリ. みずが ながれている。

36. チー イジローリ. 血が でている。

これらのri終止形は、まえに例文7でみたが、それとおなじく、シアリヲリ形に由来するものとみられる。ナガリオリなど、いかにもナガレ・オリにあてはまりそうだが～io～のところは～ariwo～から転じてきたとみなくてはならない。そして、シアリまでが他方言のシテ相当形にあたる。このシアリヲリ形に相当する他方言のシテヲリ形がri形となじみやすいことは、ri形が『メノマエ性』の表現とむすびつきやすいことのあらわれだろう。この方言でもここにri形がでやすいとしたら、おなじ事情がかんがえられそうである。ただ、標準語からの、…をどういいますかという質問だと、～Nでおわるかたちがかえってくることのほうがずっとおおかった。この辺のことはさらに調査する必要がある。

○ イクのばあい

イチー、イチン、イチスなどの終止形をもつイクはイチエンというかたちがでてきた。

37. イチエン ミリブシャリ. いって みたい。

これをイジェン ミリブシャリという話者もいた。イジだとイッテだからイチエンがイキアリ中止形なら、イジェンはイキテアリからでていることになる。だとしてもともに非シテ中止形であることにはかわりはない。しかし、イジェンはやはり特異なかたちだろう。

○ 下二段活用タイプからのアリ・リ形

いままでみてきたなかに、ナゲンなげた、イリエンいれた、ウシエーンおしえた、イジエンでた、メーエン（くさが、火が）もえた、のようなかたちがあるし、おなじ研究プロジェクトの成果報告、白田理人・山田真寛・荻野千砂子・田窪行則2011『琉球語喜界島上嘉鉄方言の談話資料』（ふりがな省略）からのウスッキエンおさえつけた、ハタミエンかためた（かついだ）、ミカキエンめがけた、などは下二段系だろう。ほかにも下二段活用タイプからのアリ・リ形がみられるとしたら、古代語時代の文法とは一致しない。なお上二段活用タイプからもウイーエンおきた、のようにアリ・リ形がでるが、琉球方言に一般にみられるように、ここの上二段活用も下二段活用タイプに吸収されているので、ウイーエンなども下二段活用タイプにいれてさしつかえない。このほか、ミロンドー（見ている）や、白田ほか2011のミローレンのような上一段活用タイプのミルからも、問題にしているかたちがでてきているが、これは下二段タイプからのアリ・リ形とちがって、ミラン、ミリブシャのように四段化したあとの成立ともかんがえられる。

ただし、古代語とのちがいは、例によって、琉球方言の古風な面のあらわれなのか、逆にinnovationの結果なのか、両方をならみつつ検討する必要がある。そのまえに、南琉球方言での二段系のアリ・リ形とのつきあわせもかかせない。これに関連して、万葉集東歌・防人歌には二段活用タイプからのアリ・リ形があるが、現在の八丈島方言では、このばあいにアリ・リ形でなくタリ形になっている。

[参考文献] (本文にあげた以外に)

金田章宏2001『八丈方言動詞の基礎研究』(笠間書院)

松本泰丈2012 [琉球方言と古代日本語―(藤井貞和)『日本語と時間―(時の文法)をたどる―』をよんで―](松本・田畑千秋共編2012『奄美語研究ノート―内容類型学からみた奄美諸方言―』(大分大学教育福祉科学部田畑研究室))

小稿は2010年9月の国立国語研究所共同プロジェクトの現地調査後、2010年10月6日海山言語研究会、2011年5月22日共同プロジェクト研究発表会での報告に、若干手をくわえたものである。